

家族社会学におけるジェンダー研究の展開

— 1970年代以降のレビュー —

山根真理

Key words: ジェンダー研究、フェミニズム、家族社会学

1. 本稿の課題

本稿の課題は、第2波フェミニズムを経過したジェンダー研究が、1970年代以降の日本の家族社会学研究において果たした理論的、実証的成果を回顧し、今後の研究課題を展望することにある⁽¹⁾。ジェンダー研究 (gender studies) は、90年代になって日本の学界に定着してきた名称である。70年代後半に「女性学」という名称で創設された学際的研究分野は、80年代に欧米のフェミニズム理論を盛んに導入し、90年代には男性をも研究対象に含め、政治・経済・開発など多様な問題関心に基づいた「ジェンダー研究」として、学界に根付いてきている。女/男の分割そのものや、その分割にもとづいて役割、権力、情緒関係を配分する制度を、創られたもの、変更しうるものとして社会構造との関連で捉えるジェンダー研究の視点は、今日の日本の社会科学において、もはや常識になったと言ってもよい。

第2波フェミニズムの起点であるウーマンリブから4半世紀を経過した90年代半ばになって、日本のフェミニズム、女性学からジェンダー研究への系譜を振り返る試みは相次いでいくつかなされているし、ジェンダーを着目点のひとつとして家族研究を振り返る仕事もなされている⁽²⁾。そのような現状にあって、「家族社会学」におけるジェンダー研究のレビューを行う意義はどこにあるのだろうか。

まず第一に、これら新興の研究分野の立場からなされる家族論が隆盛となっている近年の出版状況のなかで、家族社会学研究者としてジェンダー研究を行う存立根拠が問われており、それを考える上でこのレビューが一助となるのではないかと、いうことである。女性学、フェミニズム、ジェンダー研究にとって性役割が維持されるメカニズムを社会構造との関連で解明することは主要な問題関心の一つであり、女性役割が遂行される場である「家族」は、主要な研究領域である。これらの立場から「家族」を論ずる出版物は近年、膨大な量に上っているし、一般書のレベルでも、フェミニズム、ジェンダー視点をもつ家族論が大量に流通しているのが現状である。フェミニズム、ジェンダー視点から書かれた家族論は、家族社会学研究者の手によるものもあるが、家族社会学研究者以外の書き手によって書かれたものが多く、その中には「学」の枠にはまらない先鋭な問題意識によって現代家族におけるジェンダーの様相をあざやかに描き出したものもある⁽³⁾。そのような状況にあって、家族社会学研究者としてジェンダー研究を行う存立根拠と意義はどこにあるのか。このレビューを通して、この問題を考えてみたい。

第二に、新興の学問分野としてではなく、日本の社会学のなかで十分に認知された「老舗」としての位置を占める家族社会学におけるレビューを行うことによって、女性学以前と以後における「学」の連続性と転換を考察できるのではないかと、いうことがある。家族社会学は、伝統的に性と世代を主要変数

としてきた分野であり、しばしば「主婦の社会学」と揶揄されるように、いわば女性が過剰に主題化される分野であった。女性学、フェミニズム、ジェンダー研究の学界への定着過程が家族社会学にもたらしたのは、「女性、ジェンダーの発見」ではなく、家族内における女-男関係、家族-社会の関係を捉える視角、家族を把握する背後仮説の問い直しであった。そうした意味で、このレビューを行うことで、女性学以降のジェンダー研究は既存の学問をどのような点で変質させたのかという問題を考察できるのではないかと考えられる。

ジェンダー研究は家族社会学に何をもたらしたのか。そして家族社会学におけるジェンダー研究の独自性はどこにあるのか。これらの問題に答えることをめざして、回顧と展望を行いたい。

2. 視点と方法

以上の問題関心に基づいてレビューを行うにあたって着目するのは、①ジェンダー研究は、家族社会学の研究テーマをどのように変更したか、②ジェンダー研究は、家族社会学の理論構成をどのように変えたか、③ジェンダー研究は、現代家族を対象とした家族社会学の実証研究においてどのような成果をあげ、それは理論構成とどう関連するのか、の3点である。

これらの課題に答えるために文献、論文収集の範囲を定めるにあたって、まず「家族社会学」の境界をどのように定めるのか、という問題がある。家族社会学は当然のことながら社会学の一分野であり、社会学の立場から家族を論じたものであれば、家族社会学会員の書いたものでなくとも「家族社会学」の論文と見なすのが通常の理解であろう。このような考え方にたって日本の社会学の全国的学会誌である『社会学評論』の文献目録（1970年-1995年）の「家族」分野および「性・世代」「社会問題・社会福祉」「その他」分野に掲載されており「家族とジェンダー」に関連するテーマを扱った論文、著書リストを作成し基本的データベースにすることとした。それに社会学者が論文を発表することが多い家族研究誌である『家族社会学研究』『家族研究年報』『家族関係学』の3誌（創刊号-1996年）掲載論文の中からジェンダー視点からなされた研究を選択して加え、文献リストを作成した。

これらのデータベースから「ジェンダー研究」を抽出するにあたって、テーマとキーワードを設定し、著書、論文タイトルにキーワードおよびそれに類する語が用いられているものを選んだ。テーマ、キーワードは以下の通りである。①ジェンダー、フェミニズム（キーワード：ジェンダー、フェミニズムなど）②女性と家族（女性と家族、婦人と家族など）③性役割と女/男らしさ（性役割、性別役割分業、女/男らしさなど）④家事と主婦（家事、主婦など）⑤女性の就労（共働き、主婦の就労など）⑥母性/父性（母性、父性、育児不安、育児ネットワークなど）⑦権力関係（女性の地位、男女平等、権力、勢力、家父長制など）⑧家族愛再考（愛、情緒など）⑨「家族」再考（家族定義、家族の範囲など）⑩婚姻制度再考（非婚、非嫡出子、夫婦別姓など）。

本稿の文献リストは、以上の過程を経て作成した文献リストから、原則として歴史研究、福祉研究をはずし、『社会学評論』の文献目録に申告されていない論文、著書やその後刊行された著書であるが文中で言及したものを適宜加えて作成したものである。歴史、福祉研究をはずしたのは本誌に収録されている牟田、下夷論文との内容重複を避け、本稿で行うレビューの守備範囲を主として「現代家族」に置いていることによるものである。しかしジェンダー研究において家族・女性史および個人-家族-国家

の関係を把握する枠組みの問い直しは重要な位置を占めており、そのような観点から家族研究に対して重要な発言を行っているとは判断した著書、論文はリストに加えてある。したがって、本稿の文献リストには筆者の恣意的な選択が入っており、また論文、著書タイトルを手がかりにしたという作業手順からして、必ずしも既存のジェンダー秩序の相対化あるいは変革を志向する立場から書かれていないものも含まれていることをおことわりしておきたい。

3. 研究テーマの概観

まず著書、論文タイトルからテーマの変遷を概観しよう。テーマによって研究の厚みは異なるが、全体としてみると80年代以降、著書、論文点数が飛躍的に伸びていることを指摘することができる。その中でもキーワード、問題設定はこの四半世紀で移行してきている。

その変化は、第一にフェミニズム、ジェンダーというキーワードの浸透過程にみることができる。落合 [1984]、上野 [1985b] によるフェミニズム理論の検討、導入を皮切りに、1980年代後半にはフェミニズムというキーワードが登場するようになる。家族社会学者としての立場を明確に示しつつフェミニズムと家族研究の接合をはかった落合の『近代家族とフェミニズム』[落合, 1989c] はこの時期の代表的な作品であるが、その後フェミニズムの語は論文、著書タイトルのレベルでは後景に退き、代わって江原他編『ジェンダーの社会学』所収の山田・天木論文 [山田・天木, 1989] を皮切りに90年代以降、ジェンダーの語がキーワードとして多用されるようになってくる。この過程は、70年代後半に女性学が創設され、80年代半ばにフェミニズム理論が導入され、その上にたつて男性や階級、政治、開発など対象を拡大したジェンダー研究が90年代定着してきた日本の社会科学全体の状況とほぼ一致している。

第二に、既存の性別役割分業の変容を志向する視点が明確になってきていることを、キーワードの移行から読みとることができる。役割概念では、1970年代までの「夫婦役割」あるいは「家族役割」に代わり、1980年代以降「性役割」が役割研究のキーワードとして定着し [上子, 1980; 波田, 1981; 湯沢・阪井, 1982]、90年代になると「性別役割分業」が用いられることが多くなっていく [山田・瀬知山, 1989; 岡村, 1990; 1996; 天野, 1994c]。家事研究では家事分担に代わって80年代には家事労働のキーワードが用いられるようになる [寺田, 1981; 服部, 1987; 山田, 1989b]。母性／父性のテーマでは、「育児不安」[牧野, 1981; 1983a; 1987b; 牧野・中西, 1985]、「母親イデオロギー」[服部, 1985b]、「構造的育児不能社会」[松村, 1985] などのキーワードが登場する。これらの概念は、近代社会において女性に配分される主婦・母役割が、形成されたものであり、したがって変容しうるものであるという観点を明確に示すものであろう。さらにこの性別役割分業変容への志向性は女性役割にとどまらず、1985年代後半以降、男性性 [関井, 1989]、父親 (男性) の家事や子育て [春日, 1986a; 1986b; 1989; 牧野(カ), 1987a; 斧出, 1993; 牧野(暢), 1993; 内田, 1994; 冬木・本村, 1996] といったキーワードとともに、男性研究へと広がりを見せている。

第三に家族の内部構造分析にとどまらず、家族を家族外ネットワーク、市場、国家などの関連において分析し、さらに家族—社会関係の変容を志向する視角の登場と深化である。この視角がタイトルに明瞭にあらわれている研究としては、目黒の「ヒューマン・ネットワーク」[目黒, 1989b]、落合、関井らの「育児 (援助) ネットワーク」[落合, 1989a; 関井他, 1991] などネットワークをタイトルに

あげた研究、社会への回路としての「ケアラー」概念〔天木, 1993b〕、「家事労働の社会化」〔服部(良), 1994〕や「介護の社会化」〔天木, 1995〕、「福祉とジェンダー(女性)」をテーマとした研究〔服部, 1987; 山田, 1992a〕、木本の「家族と企業社会」研究〔木本, 1994a; 1994b; 1995a; 1995b〕、「婚外子差別」〔善積, 1991b; 1992b; 1993a〕、「非(法律)婚」〔善積, 1984; 1986; 1991b; 1993b; 1994a; 1994b; 1995a; 1995c〕、「夫婦別姓」〔草柳, 1994〕など婚姻制度の見直しに関する研究、さらには「社会の基礎単位=家族」という体制に見直しをせまる「個人を単位とする社会」をタイトルにあげた研究〔落合, 1994b〕などがあげられる。これらの視角には、善積の婚外子研究のように70年代から継続してなされているものもあるが、本格的に定着し層的にも厚みができたのは90年代に入ってからである。

第四に従来の家族社会学における家族把握の枠組みに見直しをせまる視角の登場と新たなパースペクティブの模索である。この視角は「フェミニズムの家族論」とは異なる「家族社会学のジェンダー研究」の特色をよく示すものであろう。この視角はまず、家族社会学批判としてまとめるテーマ群の登場にみることができる。吉田(啓)〔1972〕の論考のように早い時期に構造機能主義家族社会学批判を前面に出した研究もあるが、フェミニズムと歴史社会学の摂取を経て家族社会学の支配的パラダイムを検討する作業としては、山田〔1984〕、落合〔1989b〕、熊原〔1990〕らの研究が登場、その後家族社会学のパラダイム転換の原動力となっていく。同時に感情社会学、歴史社会学、フェミニズムを理論的源泉としながら「家族と情緒」の結合の自明性を問う研究〔山田, 1983; 1987b; 1994b〕、フェミニズム視角を前面に出して家族における性支配という文脈で「権力」や「暴力」を分析しようとする研究〔目黒, 1988; 江原, 1991; 「夫(恋人)からの暴力」調査研究会, 1994; 柳原, 1995〕が登場してくる。さらに家族把握の枠組みの見直しは個人を分析単位とする方法論的転換と結びつき、個人にとっての家族の意味や範囲を問う実証研究〔長山・石原, 1991; 上野, 1991; 木戸, 1996; 西岡・才津, 1996〕、フェミニズム的問題関心と前述のネットワーク研究やライフコース論〔目黒, 1985〕など個人単位の方法論の接合をはかった研究へと展開してきている。

以上のように家族社会学におけるジェンダー研究は、女性学、フェミニズム、ジェンダー研究が日本の社会科学に浸透していく過程とほぼ平行して、80年代に性別役割分業変更への志向を根付かせ90年代に男性、家族-社会関係の構造変革を視野に入れた研究へと拡大している。同時に、80年代に登場したフェミニズム、歴史社会学にもとづく家族社会学パラダイム転換への提案が、90年代になって実証研究におけるテーマや方法論の転換へと結実しているとみることができよう。

4. ジェンダー研究の理論的貢献

ジェンダー研究は、家族社会学の理論構成に対してどのような貢献をなしたのであろうか。以下、戦後日本の家族社会学において家族・ジェンダー・社会を把握するにあたって主要な位置をしめてきた二つの理論モデルとのかかわりで考えてみたい。

第一のモデルは、T.パーソンズらの役割理論を下敷きにした「機能主義役割分業モデル」である。周知のようにパーソンズはR.ベールズとともに、小集団理論を家族に適用し、外部社会への適応と課題遂行にかかわる手段的役割と、集団の維持と統合にかかわる感情表出的役割という二つの役割が分化

し、前者は夫＝父親に、後者は妻＝母親に割り当てられる傾向にあると述べた。このような役割分化を通して家族は、子どもの社会化と成人のパーソナリティ安定機能の担い手として社会体系のなかに位置づいている。ふたつの役割が男女に配分されている根拠としてパーソンズらがあげるのは、女性の出産、授乳機能である。出産、授乳という身体的機能が幼児に対する母親の関係を優先的なものにしてしまうために、このような機能を欠く男性は、それに代わる道具的機能へと専門化されていくというのである。さらに彼らは、この二つの手段的役割を男性に、表出的役割を女性に配分するのは産業社会に適合的であるとみなした [Parsons & Bales, 1956]。

このモデルは、戦前期から日本の家族研究において主流の位置を占めていた制度的研究と一線を画して1960年代に定着した、内部構造論の役割理論の中核となる理論モデルである。機能主義役割分業モデルは、その後日本の家族社会学に大きな影響力をもった理論であるだけでなく、高度経済成長期の家族政策の理論的根拠にもなり、世論形成にも影響をあたえた。それは、高度経済成長期の産業構造転換にともなって大衆化した、男性雇用労働者と専業主婦が形成する家族に対して説明力のあるモデルとなると同時に、異質対等論のよそおいのもとに性別役割分業にもとづく家族を正当化し、それ以外の家族や役割分業に不満をもつ女性を逸脱視する社会的効果をもたらすことになった。

したがって性別役割分業の変容を志向する議論の多くは、この機能主義役割分化モデル批判から出発している。そのなかでも日本の家族社会学で家族・ジェンダー・社会を把握するモデルの変遷を考えると、機能主義役割分化モデルを否定しながらも女性学、フェミニズムからジェンダー研究へと至る流れとは一線を画する、もう一つの重要な流れの存在を指摘することができるように思われる。

それは社会主義思想の影響を強く受け、資本主義体制下における女性・家族抑圧という問題把握をする立場からなされる、性別役割分業批判である。この立場からの性別役割分業批判は、内部構造論に傾斜する形で発展してきた家族社会学が、全体社会と家族のダイナミックな関連を問う観点が弱かったことへの反省とともに生まれてきた、1980年代の研究動向のひとつである。布施・玉水編著『現代の家族』[布施他, 1982]、布施『新しい家族の創造』[布施, 1984]、布施・清水・橋本編『双書現代家族の危機と再生1-3』[布施他, 1986]などの著作は、この立場を基本において書かれたものである。

この立場から家族・ジェンダー・社会を把握するモデルは、「社会主義平等家族モデル」とでも呼ぶうるものである。上記の著作は、離婚や子どもの荒れなどの現象を現代家族の危機ととらえ、家族危機の根本的要因を国家独占資本主義の行き詰まりにみる。人間性にとってなくてはならない生活共同体である「家族」が、国家独占資本主義に包摂されることによってゆがめられている、とみるのである。この危機を克服する可能性をもつ社会階層として労働者の共働き家族に注目し、その生活のなかに性別役割分業を克服し、近隣、地域との連帯を志向する「新しい家族の創造」の萌芽をみる、という論理構成をとっている。布施が1984年の『新しい家族の創造』のなかで、「職業人としても生活者としても自立した男女が共生する家族像の創造へむけての歩みは人間性の回復をめざす社会改革に連動する営み」[布施, 1984, 245] ととらえる言葉は、この論理をよくあらわすものである。布施によるこの単著に、社会主義平等家族モデルをもっとも明瞭にみてとることができる⁽⁴⁾。

社会主義平等家族モデルは機能主義役割分化モデルの批判を通して提示された、戦後家族社会学におけるもう一つの支配的モデルである。二つのモデルは近代産業社会（資本主義社会）と性別役割分業に

対する評価という点では決定的に異なるが、女性学、フェミニズムを経たジェンダー研究の理論構成と比較してみると、実は共通した理論的前提のうえにたっている。それは、①機能集団、生活共同体という違いはあるが、家族を人間の発達と生存にとって不可欠な社会の基礎単位とみなすこと、②家族に対して情緒的領域との意味づけを行っていること、③家族を、一对の男と女の結合を契機として形成され、子どもを養育する単位とみなす核家族モデルをとることの三点に要約できるように思われる。ジェンダー研究の理論的貢献は、二つのモデルが共通してもつこの理論的前提を問い直すパースペクティブを提供したことにある。ジェンダー研究の蓄積は80年代以降膨大な量にのぼるが、家族社会学に対する理論的貢献を果たした研究視角として、以下の4つの流れを指摘しておきたい。

第一に1980年代から比較的若い研究者によって精力的に導入がはかられた、ヨーロッパの歴史社会学研究のインパクトである。日本の家族社会学においてこの分野の導入は、フェミニズムへの問題関心をもつ研究者によってすすめられてきた。落合 [1985; 1989b; 1989c; 1994c]、山田 [1987b; 1994b]、宮坂 [1985]、牟田 [1991] らによるヨーロッパ歴史社会学研究の導入と整理、さらにそれを日本の歴史的文脈のなかに展開する試み [落合, 1989c; 1994a; 1994c; 田間, 1991; 上野, 1994; 牟田, 1996] は、現代に通ずる主婦役割、母役割、セクシュアリティが歴史的に構成されたものであることを再認識させるとともに、上に述べた家族の集団性、情緒性、核家族モデルを相対化し、それこそが近代家族モデルであることを示すうえで大きな貢献を果たした。これらの論者の多くが、ヨーロッパの研究動向の単なる紹介と応用にとどまらず従来の家族社会学に支配的であったパラダイムの見直しを強調しているのは、逆に60年代以降の家族社会学における近代家族モデルの強固さを示すものであろう。

第二にフェミニズムの「家父長制」(patriarchy) 概念の導入である。マルクス主義フェミニズムの立場から書かれた上野の『家父長制と資本制』[上野, 1990b]、文化人類学や社会学における従来の「家父長制」概念との関連でフェミニズムの「家父長制」概念を位置づけ、それを東アジアにおける「ジェンダーの比較社会学」として展開した瀬地山の一連の論考 [瀬地山, 1990a; 1990b; 1990c; 1993; 1994; 1996] は、家族社会学のなかに、このフェミニズムの中核概念を定着させるという貢献を果たした。フェミニズムの家父長制概念は立場、論者によって異なるが、「男性支配」を中核におく点に最大の特徴がある。この概念が家族社会学に導入されることの意義は、社会学で一般的に用いられていた「家父長制」(patriarchalism) の用法とは異なり、家族における権力を、過ぎ去った「伝統家族」の問題ではなく、近代家族、さらには現代家族の問題として論じることを可能にしたこと [瀬地山, 1990a; 1996]、とくにマルクス主義フェミニズムに明確だが、性支配を資本制とは独立した変数とみなすことで、社会主義平等家族モデルのもつ経済体制決定論を克服する視角を提供したことがあげられる。

第三は「個人単位」の視角である。近年の家族変動を把握するキー概念として「個人化」の語が一般化し、社会の単位を家族から個人に移行させる提案が隣接分野の刺激 [伊田, 1995] を受けながら家族社会学においても浸透してきたのは1990年代になってからであるが、アメリカ家族社会学、フェミニズムに学んで早い時期からこの視角を打ち出していた目黒の仕事は、家族社会学におけるジェンダー研究の先駆的業績として銘記すべきものであろう。目黒(野尻) が1975年にすでに打ち出していた「分析単位としての家族」への疑義は、当時の日本の家族社会学の状況を考えれば、まさに卓見である [野尻(

目黒), 1975]。目黒の仕事はアメリカの性役割研究の検討、ジェンダーと権力に関する学説の整理、ジェンダー研究とライフコース研究、ネットワーク研究との接合など多岐にわたるが、社会の構造変動とのかかわりで女性の变化を位置づけ、性役割革命をへたのちの家族は個人が選択するライフスタイルのひとつとなり、社会システムも個人単位のオルタナティブ・システムになるという把握 [目黒, 1987a ; 1993] は、日本の家族社会学に支配的な核家族モデル、家族=社会の基礎単位という前提をくつがえし、ポスト近代家族を射程にいられて家族・ジェンダー・社会の構造転換をとらえる理論的視座を提供したという点でとりわけ重要だと思われる。

最後にとりあげるのは「家族と企業社会」論の視角である。日本型企业社会をジェンダー視点で分析する研究動向は90年代の日本の社会科学において注目すべき動向である。家族社会学にとって重要な論者は、労働社会学から出発し家族、ジェンダー研究と労働研究の接合をはかった木本である。木本はマルクス主義フェミニズム、歴史社会学、フェミニズムによる「家族賃金」観念研究、生活問題研究、労働社会学など多岐にわたる理論的検討を通して、個人単位の観点、家族愛を相対化する観点、家族を企業社会の従属変数とみなすのではなく企業社会と相互に浸透しあうものとみなす観点を獲得している [木本, 1990 ; 1991 ; 1992a ; 1992b ; 1994a ; 1994b ; 1995a ; 1995b ; 1995c]。さらにトヨタに勤務する労働者家族を対象にした実証データを用いて、現代日本の家族が比較的安定した様相をみせているのは、企業社会が近代家族モデルを福利厚生制度などを通して家族に付与し、一方労働者、家族の側も物質優先主義の価値観を共有することで企業社会を下支えするという「共犯関係」が存在するためだと主張する [木本, 1995a]。1995年の『家族・ジェンダー・企業社会』は、実証研究部分が「個人単位」視角で十分に展開されていないという課題はあるものの、ジェンダー研究の理論的視角と実証分析を統合させて現代日本社会の家族・ジェンダー・社会分析を行った力作である。

以上のように家族社会学におけるジェンダー研究は、フェミニズム、歴史社会学、労働社会学など、70年代までの家族社会学の「外部」から理論視角を取り込み、戦後日本家族社会学における二つの近代家族モデルを転換させたとみることができよう。

5. ジェンダー研究の実証的成果

それでは家族社会学においてジェンダー研究はどのような実証的成果をあげたのであろうか。実証研究を整理するやり方としては、複数の研究知見を総合して命題化をはかるのが常套手段であろうが、本稿が対象にする時期の長さ、文献量から考えるとそれは困難である。そのような作業は個別分野のレビューにまかせ、本稿では上で述べたジェンダー研究の理論構成とのかかわりで、現代家族を対象にした実証研究の整理を試みることにする。

まず全体として、性役割、家事、母性/父性、共働きなど広い意味での役割、とくに女性役割を主題にした実証研究が多く、ジェンダーの実証研究は、まずは役割研究として行われてきたことが指摘できる。役割研究の蓄積にははるかにおよばないものの、90年代になって家族の多様化、個人化への関心と連動するかたちで非法律婚、コンピューターなどオルタナティブライフスタイルをテーマにした調査研究や、感情社会学や構築主義理論の影響を受けて家族の意味や範囲をあつかう実証研究など、広い意味で「家族」を再考する実証研究が続いて発表されていることは、「家族単位」を相対化するという、ジェ

ンダー研究の理論的貢献を実証研究に結びつける動向として注目に値する。家族における権力、情緒と家族の結合を問う問題設定をした実証研究は少ない。家族における権力の問題はフェミニズムの中心概念である家父長制の核心であり、理論的に主題化した研究には目黒 [1988]、江原 [1991]、柳原 [1995] らの論考があるが、実証研究あるいはそれを志向した研究は、熊谷による資源論を基礎にした夫婦の権力構造と暴力の国際比較 [熊谷, 1979a; 1979b]、ネットワーク論や交換理論を基礎に実証研究における操作概念の検討を行った渡辺 [1980, 1989] の論文、「夫 (恋人) からの暴力」調査研究会 [1994] によるフェミニズムの問題意識に基づいた調査論文など散見されるにとどまっている。家族と情緒の結合関係も、従来の支配的家族モデルとの関連で考えれば理論的には重要な主題であるが、実証研究のレベルでは山田の家事調査 [山田, 1994b]、苫米地による夫婦別姓のレトリック分析 [苫米地, 1996] などの形で実証研究が散見されるようになった分野であり、これもまだ手薄な分野である。

それでは、広い意味で役割をみつかった実証研究でどのような問題がたてられ、どのような概念が用いられ、それは上述の理論的貢献とどうかかわるのか。

まず性別役割を主題にした実証研究についてみると、時期にともなって性別役割分業に対する研究者の問題意識が変化してきている。70年代の上子の調査研究が役割理論、認知理論の検証という問題意識からなされているのに対し [上子, 1971]、80年代以降の研究では女性役割変更への問題意識が明瞭に示されるようになり、90年代になると男性役割変更 [関井, 1989; 関井・本村, 1989]、性別役割分業の多元性 [山田・瀬地山, 1989; 関井他, 1991; 大和, 1995] などの問題意識が登場してくる。用いられている概念は、性別役割観念 [上子, 1971]、性別役割態度 [服部, 1980]、性役割規範 [山本・本村, 1986]、性役割意識 [福富・洪, 1986]、性別意識 [吉田, 1992]、性別役割分業意識 [大和, 1995]、性別役割分業観 [関井, 1989; 関井・本村, 1989; 関井他, 1991] など必ずしも統一されていないが、行動のレベルではなく規範、態度、意識のレベルをみつかっており、心理学研究の成果から操作概念を用いている研究が多い。また女らしさ／男らしさ、アイデンティティ、自己実現、男性性、両性性 (androgyny) など、心理学のなかで鍛えられた概念とともに性別役割をみつかった研究が多いのも特徴である。研究方法は質問紙調査の統計的分析を行ったものが大勢をしめる。知見としては女子の性別役割におよぼす母親の影響力 [服部, 1980; 長津, 1991a]、性別役割分業は多次元の現象でありそのため性別役割分業の流動化が直線的には進まないことの指摘 [山田・瀬地山, 1989; 大和, 1995]、男性性 [関井, 1989] や性モラル [長津, 1991a] などジェンダーに関する他の変数との関わりについての指摘、性別や社会経済的地位による属性分析結果などが得られている。しかし理論とのかかわりで考えれば、性別役割分業の多元性に関する研究のなかに愛情と性別役割の結びつきの強固さにつながる興味深い指摘もみられるものの、家族単位の相対化や個々の知見を全体社会の構造とかかわらせて考察する視点は弱いように思われる。この要因は、性別役割研究が心理学の概念に多くを負っていることだけでなく、性別役割という概念そのものが男女の対を前提にしていることにあるのではないかと考えられる。

共働き、女性の就労のテーマも質問紙調査法を使った実証研究が積み重ねられてきた分野である。布施が「男は仕事、女は家庭という性別分業がしっかりと根をおろす日本において、共働き家族など、研究の対象にもならないと考えられているのではないかと思える風土にあった」 [布施, 1984, 272] と1960年代半ばを回想して述べる状況から考えれば、この分野は格段の研究蓄積をあげたとみることができ

る。今日ではこの分野は『母親の就業と家庭生活の変動』[原, 1987] や『共働き家族』[袖井他, 1993] など、総合的な研究成果を収めた著書を手にすることができる分野に成長している。共働き研究の問題意識は、80年代までは母・妻の就労が家族の機能障害をもたらすという社会通念に対する疑問から出発して、共働き家族における「問題」を非共働き家族のそれと比較するという問題設定を行った研究が多いが、90年代になると、常雇と自営それぞれの就労形態をとる夫婦の第一子誕生への対処 [長津, 1991b]、デュアル・キャリア・カップルに脱「近代家族」の可能性がみられるのか [松信, 1993; 1995]、コンピューターマリッジの実態把握 [三善, 1991; 1993] など、新しい問題設定を行った研究も登場する。このような研究動向の変化は、現実の社会変動のなかで「共働き」が一般化してきたこともさることながら、80年代までの研究を通じた共働き家族は非共働き家族と比べて子どもの発達や夫婦関係に対してネガティブな影響は結局確認されなかったことによるものと考えられる。共働き家族研究の蓄積は、女性の就業＝家庭の機能障害とする機能主義役割分業モデルを否定するうえで貢献を果たしたのである。しかし逆にいえば、この分野の研究は「共働きでも家族の機能障害はない」ことを証明することにエネルギーを注がねばならなかったために、上にあげた新しい研究動向のような、共働き家族の多様性、個人単位社会と男女の就労、家庭生活といった視点からなされる研究の登場を遅らせたともみられるように思う。今後このような視点からの研究の発展が待たれる分野である。

母性／父性研究も80年代以降、実証研究が前進した分野である。日本における女性の抑圧が「母であること」の周辺で尖鋭にあらわれることを反映してか、この分野は実証研究の問題設定、操作概念がジェンダー研究の理論的成果にみあう形で発展してきた分野である⁶⁾。「産業疲労」という労働研究の概念を応用して、母親自身の負荷現象として育児問題を把握する牧野の「育児不安」概念 [牧野, 1981; 1983a; 1987b; 牧野・中西, 1985]、育児の援助者を母親を中心に家族外にも拡大してとらえる落合らの「育児援助(ネットワーク)」概念 [落合, 1989a; 関井他, 1991; 山根他, 1990]、産育の比較社会学のために船橋が提起した、出産・哺乳過程に限定した母性／父性概念、親性、距離、産育保障概念など、母子関係論だけでなく核家族単位をも相対化する概念が用いられるようになった。これらの概念を用いた実証研究は、「育児不安の影響要因は、父親の育児参加の重要性和母親自身のネットワークの広さである」[牧野, 1983a; 1987b; 牧野・中西, 1985]、「現代の育児は種々の育児ネットワークに支えられることによって成り立っている」[落合, 1989a] など、研究知見においても母子関係論と核家族単位をくつがえす「発見」をすることになった。「父親としての男性」を対象にした研究も80年代後半になって登場した分野である。男性のアイデンティティにとっての子育ての重要性 [斧出, 1993; 牧野(暢), 1993]、「表出」「共行動」など非伝統的な父役割が子どもに認知されるようになったこと [冬木・本村, 1996] などが指摘されるようになってきている。これらの実証研究は主として質問紙調査の方法を用いたものであるが、父子家庭の「集い」への参与観察の方法をとり、そこでかわされる会話を資料にして父子家庭の孤立と閉塞、解放の可能性を述べた春日の父子家庭研究 [春日, 1986a; 1986b; 1989] は、家族社会学のジェンダー研究における新しい可能性を示す作品である。

家事研究の分野も「家事分担」「役割」概念からの脱皮をはかることによって、ジェンダー研究の理論に対応した概念枠組みを構築しつつある分野である。直井らによる職業労働研究の枠組みで家事を把握する調査研究 [直井, 1989]、永井の家事遂行 [永井, 1992]、品田の家事時間 [品田, 1996] など「

分担」ではなく絶対量で家事を把握する調査研究、家事と情緒の結合〔山田, 1994b〕や、繰り延べ可能家事／不能家事〔永井, 1992〕など、家事が当事者にとってもつ意味を問題にする調査研究など、近年の家事研究は「役割」概念を離れることによって、家族領域の内外における労働の性質や意味を把握することを可能にした。これらの概念を用いた研究知見は、「家事は女性の職業労働に比べると総合的・全人的」〔直井編, 1989〕、「共働きの妻は、育児以外の家事を省略することによって家事と仕事の調整を行っている」〔永井, 1992〕、「個人の人生の各場面において常に、家事か仕事かの二者択一の迫られているのが既婚女性のライフスタイル多様化の実態である」〔品田, 1996〕など、現代社会のジェンダー状況についてのリアルな認識を示している。方法的には質問紙調査がほとんどであるが、内田〔1994〕のように、インタビューの手法を用いて男性の家事に対する意味づけを把握しようと試みた研究も登場してきている。

家族の範囲や意味、婚姻制度再考など、広い意味で「家族」再考のテーマをあつかった実証研究は、善積による先駆的な非嫡出子調査〔善積, 1983；1986〕があるものの、主として90年代になって実証研究が進んできた分野である。家族の範囲や意味をテーマとする実証研究には山田〔山田・天木, 1989〕、上野〔1991〕のようにジェンダー研究の視点を強くもつものもあるが、社会学において近年注目されているエスノメソドロジーや構築主義の観点から家族の意味分析を試みる木戸〔1996〕、苫米地〔1996〕のような立場もある。方法論的にも、質問紙調査を用いた調査研究〔山田・天木, 1989；長山・石原, 1991；西岡・才津, 1996〕だけでなく、多様な家族を対象にしたインタビュー〔上野, 1991〕、新聞・雑誌記事のレトリック分析〔苫米地, 1996〕、大学生を対象にした会話分析〔木戸, 1996〕など、質的方法の展開がみられる分野である。その結果、家族の意味や範囲が個人間で異なる可能性をもつこと〔山田・天木, 1989；上野, 1991〕、「家族」は状況のなかで規定され、再生産される側面をもつこと〔西岡・才津, 1996；木戸, 1996〕など、家族の単位性を実証研究のレベルで相対化する知見が得られている。婚姻制度再考のテーマをあつかった実証研究は、さきにあげた善積の非嫡出子調査、90年代になって家族モデル多様化の問題意識をもって行われた非法律婚調査がある〔善積, 1993b；1994a；1994b；1995c；1997〕。前者は質問紙を用いた児童相談所の里親委託調査、後者は婚外子差別廃止、別姓運動にかかわっている団体に依頼した質問紙調査とインタビューを併用している。80年代の非嫡出子調査では非嫡出子発生の裏に性のダブルスタンダードを許容する社会規範が存在すること、90年代の非法律婚調査では、非法律婚カップルは法律婚カップルに比較して非伝統的な役割関係や価値観をもつこと〔善積, 1994b〕、非法律婚カップル当時者のライフスタイル認識に「事実婚」「非婚協棲」「コミュニーター」の立場があること〔善積, 1994b；1995a〕などが報告されている。

以上のように家族社会学においてジェンダーに関する実証的研究は、テーマは役割研究に、方法論は質問紙調査を用いた統計的分析に偏ったかたちで展開してきたが、80年代後半から90年代にかけて母性／父性、家事、家族再考などの分野を中心に、ジェンダー研究の理論的貢献と対応した概念構成がはかられ、質的方法も開発されてきた。

6. 今後の研究課題

最後に、家族社会学におけるジェンダー研究の課題について若干の私見を述べたい。まず理論的達成を確認し、それを実証研究と接合させることが必要である。ジェンダー研究は性別役割分業の克服だけを問題にしたのではなく、家族の単位性、情緒性、核家族モデルも相対化したのであった。したがって実証研究においても、家族を単位とみなし、家族の内側にだけ光をあてることはジェンダー研究の視角として適切ではない⁶⁾。個人の日常的な家族・ジェンダー体験と、社会、経済、政治との相互浸透過程と変容過程を分析するとともに、日常的な家族・ジェンダー体験において「家族」と人が呼ぶ領域特有の権力関係を分析することが課題であろう。そのためには、ストレス研究、ライフコース論、ネットワーク論など家族社会学のなかで発展してきた個人単位アプローチや、構築主義、エスノメソドロジーなど社会学において近年開発されてきた、日常の相互作用場面で生じる権力分析の方法との対話が必要だと思われる。

テーマをさらに拡大することも必要である。とくに実証研究の展開が遅れている家族と権力に関する研究は重要であろう。「不本意な選択の強要」を権力に関連する現象としてとらえる江原の提案は、家族と権力の主題を発展させる手がかりになると考えられる [江原, 1991]。セクシュアリティもほとんど手つかずのテーマである。フェミニズムにおいて、中絶、避妊、性暴力などセクシュアリティに関わるテーマは重要な問題領域であった。方法の難しさはあろうが、歴史研究としてはいくつか成果があがっているこのテーマ [荻野他, 1990; 田間, 1991; 牟田, 1996] を現代家族研究として展開させることは、ジェンダー研究としては必須である。同棲、同性愛、シングルなど多様なライフスタイル研究のテーマを拡大し、そこから見えてくる「完全家族」の特質や意味を明らかにすること、労働、福祉、医療などのシステムと家族・ジェンダーの相互浸透過程分析なども現代社会分析として必要な作業である。

理論的確認とテーマ拡大は、方法論の多様化を要請する。社会、経済、政治と家族・ジェンダーの相互関連を分析するためには、労働研究、地域研究、階層研究など実証研究の蓄積をもつ他の研究分野との対話を経て質問紙調査を精練させる作業が必要となろう。そうすることではじめて、経済体制や地域、近代化とのかかわりで主婦および女性労働のパリエーションを論じた落合や瀬地山の枠組みを、実証研究に応用可能なものにすることができると考える。逆にフェミニズムの提起する権力分析、「家族」「母」「父」「子ども」などの意味や感情に関する分析には、構築主義やエスノメソドロジーに学んだ参与観察、会話分析などの質的研究方法が有効であろう。

このような研究方向はある意味で、家族社会学の境界をゆるがすとともに、家族研究が対象としたはずの「家族」を方法論的に解体するという方向である。しかしこれは決して家族社会学の解体ではなく、「外部」とさらに刺激しあいながら家族社会学を豊かにしていく道だと筆者は考える。愛と家族単位という近代的幻想をはぎ取って、人々の家族的体験をジェンダー視角から社会学することにこそ、家族社会学におけるジェンダー研究のアイデンティティをみいだすことができるであろう。

注

- (1) 本稿は、1997年度第7回日本家族社会学学会シンポジウム「家族社会学の回顧と展望—1970年代以降」で筆者が担当した「ジェンダー論」の報告を発展させたものである。

- (2) 1990年代半ばになって、日本における第2波フェミニズムの成果を総括する選集 [井上他編、1994-1995]、フェミニズム理論を要約、整理したテキスト [江原他編、1997] の刊行が相次いでいる。女性学以降の研究の回顧と展望を行った論文としては江原 [1997]、瀬知山 [1996] の論考がある。ジェンダー視点を一つの切り口として家族研究の現状分析と展望を行った論文としては松橋 [1997] の論考がある。ジェンダー、フェミニズム研究は、総括の時期を迎えているといえることができるだろう。
- (3) たとえば金井淑子編『シリーズワードマップ家族』や、上野千鶴子編『シリーズ変貌する家族』は、家族社会学会員以外の書き手による論考がほとんどをしめている状況を想起されたい。
- (4) 布施はその後、水田珠枝の「家庭崩壊」論との対峙を経て [布施, 1986; 水田, 1985]、フェミニズムとは一定の距離をとり、性別役割分業批判の論点よりも「愛の生活共同体」という家族本質論の論点を前面に押し出す議論を行うようになっていく。このあたりの事情については木本が検討を行っている [木本, 1992a; 1995a]。
- (5) 家族研究のなかでフェミニズム研究はまだ中心の位置にはいないが、家事労働の分野でのみ中心に入ったと要約されるアメリカ家族研究の状況と比較すれば、この動向は日本の特徴と指摘できるかもしれない [Thompson & Walker, 1995]。
- (6) 日本のみならず世界的に、社会政策の後退とともに家族の価値、家族単位の普遍性が政策論においても世論としても強調される事態が生じることを考えれば、ジェンダー研究がその流れに足元をすくわれないためにも、この点を強調しておくことはとりわけ重要である [渋谷, 1994; Stacey, 1986; 1993]。

参考文献 (文献リストに含まれていないもの)

- 江原由美子, 1996, 「女性学・フェミニズム・ジェンダー研究」, 『家計経済研究』32, 86-93.
- 江原由美子・金井淑子編, 1997, 『フェミニズム』, 新曜社.
- 伊田広行, 1995, 『性差別と資本制—シングル単位社会の提唱』, 啓文社.
- 井上輝子・上野千鶴子・江原由美子編, 1994-1995, 『日本のフェミニズム』①-⑦, 別冊.
- 加藤秀一・瀬地山角・坂本佳鶴恵, 1993, 『フェミニズム・コレクション』1-3, 勁草書房.
- Parsons, T. & Bales, R.F., 1956, *Family-Socialization and Interaction Process*, Routledge and Kagan Paul, 橋爪貞雄他訳, 1981, 『家族』, 黎明書房.
- 瀬地山角, 1995, 「ジェンダー研究の現状と課題」『ジェンダーの社会学』, 岩波書店, 227-243.
- (やまね まり・愛知教育大学)

■家族社会学におけるジェンダー研究に関する文献リスト■

- 天木志保美, 1991, 「老人問題とジェンダー」, 『評論・社会科学』43, 36-55.
- 天木志保美, 1993a, 「家族と地域—ジェンダーの視点から」, 『市政研究』98, 19-25.
- 天木志保美, 1993b, 「ケアラーとしての主婦—社会への二つの回路」, 『家族社会学研究』5, 75-86.
- 天木志保美, 1993c, 「こどもから見た日本の母親」, 『評論・社会科学』46, 58-82.
- 天木志保美, 1995, 「介護の社会化と男女シェアリング—インフォーマルなサポートを中心として」, 『地域福祉研究』23, 20-28.
- 天野正子, 1984, 「現代日本の母親像」, 女性学研究会編『講座女性学1 女のイメージ』, 勁草書房, 129-160.
- 天野正子, 1987, 「母親の就業と家族関係」, 原ひろ子『母親の就業と家庭生活の変動』, 弘文堂, 20-40.
- 天野正子, 1993, 「女のなかの家族」, ジョン・ハリス編・天野正子監修・門田美鈴編『家族』下, 平凡社, 115-121.
- 天野正子, 1994a, 「新たな子育て文化の創造へ—母親像の変貌のなかで」, 岡本夏木他編『講座幼児教育の現在と未来5』, 岩波書店, 33-68.
- 天野正子, 1994b, 「母親の就労と家族関係—父子関係を軸に」, 『都市問題研究』45-5, 45-65.
- 天野正子, 1994c, 「深層の新性別役割分業」, 金平輝子編『男女協同社会の創造』, ぎょうせい, 39-66.
- 天野正子, 1995, 「問われる性役割—自己決定権の確立に向けて」, 中村政則他編『日本通史第21巻・現代2』, 岩波書店, 185-220.
- 馬場明男, 1980, 「主婦の社会学」, 『社会学論叢』78, 69-76.
- 江原由美子・長谷川公一・山田昌弘・天木志保美・安川一・伊藤るり, 1989, 『ジェンダーの社会学—女たち/男たちの世界』, 新曜社.
- 江原由美子, 1991, 「権力装置としての家族」, 『シリーズ変貌する家族3 システムとしての家族』, 岩波書店, 59-90.
- 江原由美子, 1994, 「結婚しないかもしれない症候群—現代日本における結婚のリアリティ」, 『家族社会学研究』6, 37-44.
- 遠藤恵子, 1989, 「現代日本の家族における性別役割分業観」, 『社会学研究』54, 25-44.
- 福富護・洪緑萍, 1986, 「現代青年の性役割意識—中国と日本の比較研究」, 『東京学芸大学紀要教育学』37, 179-190.
- 松橋恵子, 1991, 「産育の比較社会学の枠組みと鍵概念をめぐって」, 『国際学レビュー』3, 143-158.
- 松橋恵子・堤マサエ, 1992, 『母性の社会学』, サイエンス社.
- 松橋恵子, 1994, 『赤ちゃんを産むということ—社会学からのこころみ』, 日本放送出版協会.
- 松橋恵子, 1996, 「家族研究の現状と課題」『〈家族〉の社会学』, 岩波書店, 237-256.
- 古池純子・要田洋江・岩堂美智子, 1987, 「保母の性役割意識について」, 『乳幼児発達研究所研究紀要』4, 10-25.

- 布施晶子, 1970, 「共働き家庭」, 『家庭科教育』44-6, 184-196.
- 布施晶子・玉水俊哲編著, 1982, 『現代の家族』, 青木書店.
- 布施晶子, 1984, 『新しい家族の創造—『母親』と『婦人労働者』のはざままで』, 青木書店.
- 布施晶子, 1985, 「『兼業主婦』主流の時代—模索のなかで創りつつあるもの」, 齊藤茂男編『講座現代・女の一生4 夫婦・家庭』, 岩波書店, 251-289.
- 布施晶子, 1986, 「現代の家族—危機の構図と再生への模索」, 布施晶子・清水民子・橋本宏子編『双書現代家族の危機と再生 1』, 青木書店, 3-72.
- 布施晶子・清水民子・橋本宏子編, 1986, 『双書現代家族の危機と再生 1-3』, 青木書店.
- 布施晶子・玉水俊哲・庄司洋子編, 1992, 『現代家族のルネサンス』, 青木書店.
- 布施晶子, 1993, 『結婚と家族』, 岩波書店.
- 冬木春子・本村汎, 1996, 「青年期における子どもが認知した父役割構造の研究」, 『家族関係学』15, 45-55.
- 波田あい子, 1981, 「性役割と家族研究」, 女性社会学研究会編『女性社会学をめざして』, 垣内出版, 85-112.
- 原田尚, 1984, 「実証主義における夫婦家族イデオロギー」, 『鹿児島経済大学社会学部論集』3-3, 1-23.
- 原ひろ子編, 1987, 『母親の就業と家庭生活の変動』, 弘文堂.
- 原ひろ子・牧野カツコ, 1987, 「子ども・家庭・地域」, 原ひろ子編『母親の就業と家庭生活の変動』, 弘文堂, 108-127.
- 服部範子, 1975, 「『家族解体』概念の明確化」, 『人文論叢』1.2, 16-28.
- 服部範子, 1980, 「女子学生の性別役割態度とその家族的要因」, 『ソシオロジ』25-1, 79-100.
- 服部範子, 1983, 「若い女性の生活意識」, 四方壽雄編『現代家族の生態』, ミネルヴァ書房, 129-173.
- 服部範子, 1985a, 「家族における性差別」, 山村義己・大越愛子編『女と男のかんけい学』, 明石書店, 79-109.
- 服部範子, 1985b, 「障害児と母親イデオロギー」, 『女性学年報』6, 1-15.
- 服部範子, 1987, 「女性と福祉—家事労働との関連性」, 山根常男監修『家族と福祉の未来』, 全国社会福祉協議会, 120-135.
- 服部範子, 1989, 「育児期女性の生活実態と意識—親への移行との関連において」, 『日本家政学会誌』40-6, 467-476.
- 服部範子, 1990, 「エレン・ケイの母性主義思想」, 『家族社会学研究』2, 70-80.
- 服部範子, 1993, 「児童虐待の電話相談からみた現代家族—“子どもの虐待ホットライン”の実践から」『家庭経営学研究』28, 33-39.
- 服部範子・青野秀織, 1993, 「現代人の性別役割意識とライフスタイルの多様化」, 『兵庫教育大学研究紀要』13-3, 215-229.
- 服部範子・三島令子, 1994, 「ひとり親家庭への社会的サービスに関する一考察—父子家庭の事例を中

- 心に」, 『兵庫教育大学紀要』14, 159-172.
- 服部範子, 1995, 「ジェンダーの視点からみた家族変動」, 『兵庫教育大学研究紀要』15, 115-123.
- 服部良子, 1994, 「家族の変容と家事労働の社会化」, 竹中恵美子・久場嬉子編『労働力の女性化—21世紀のパラダイム』, 有斐閣, 179-215.
- 林廓子, 1989a, 「家事とはどのような仕事か—内容と時間」, 直井道子編『家事の社会学』, サイエンス社, 31-79.
- 林廓子, 1989b, 「老人同居家族の家事と核家族の家事」, 直井道子編『家事の社会学』, サイエンス社, 113-136.
- 樋口晟子, 1987, 「家、家族、家庭をめぐる男女平等論」, 『東北福祉大学紀要』14, 1-16.
- 樋口晟子, 1989, 「家族とフェミニズム」, 『社会学研究』54, 1-23.
- 樋口晟子, 1990, 「男女平等と家族」, 『東北福祉大学紀要』15, 1-14.
- 樋口晟子, 1991, 「資本制と家父長制をめぐるフェミニズム論」, 『東北福祉大学紀要』16, 1-14.
- 樋口晟子, 1992, 「賃労働と家事労働—家族の変容とフェミニズム」, 『東北福祉大学紀要』17, 1-16.
- 樋口晟子, 1993, 「個人と家族と平等」, 『東北福祉大学研究紀要』18, 17-31.
- 樋口晟子, 1994, 「家族の終焉とフェミニズム」, 『東北福祉大学研究紀要』19, 1-15.
- 樋口晟子, 1995, 「性別役割分業と家族」, 『東北福祉大学研究紀要』20, 1-16.
- 堀紀子・本村汎, 1996, 「母性表象の因子分析の一研究」, 『家族関係学』15, 23-31.
- 細田盛夫, 1976, 「しつけ不安の家族的背景—母親の就業と家族形態」, 『家族研究年報』2, 17-30.
- 細辻恵子, 1986, 「女性と表出的役割」, 中村祥一編『社会病理学を学ぶ人のために』, 世界思想社, 169-192.
- 本田弘子, 1988, 「妻の就労と家族の変容」, 『ケース研究』217, 38-51.
- 李瓊媛, 1993, 「韓国における性別役割分業観と女子教育—教育の場における二重構造」, 『家族社会学研究』5, 87-100.
- 李瓊媛, 1994, 「良妻賢母規範の定着をはかる装置としての女子教育」, 『家族関係学』13, 101-111.
- 稲葉昭英, 1995, 「性差、役割ストレイン、心理的ディストレス—性差と社会的ストレスの構造」, 『家族社会学研究』7, 93-104.
- 石川実, 1994, 「〈父性不在〉論と父子関係の実態—理論的検討とひとつの調査」, 『都市問題研究』41-47, 118-133.
- 岩堂美智子, 1984, 「共働き家庭の親子関係」, 『青少年問題研究』33, 43-63.
- 海重径子, 1994, 「『オール読み物』にみられる『父の観念』—父—娘関係と父—息子関係」, 原ひろ子他編『ジェンダー』, 新世社, 319-335.
- 垣吉僚子, 1994, 「育児出版物から見たアメリカの育児観の変遷」, 『家庭教育研究所紀要』16, 82-90.
- 上子武次, 1971, 「幼児の性別役割観念—父出稼ぎ児と父在宅児の比較」, 『ソシオロジ』17-1, 2合併号, 120-132.
- 上子武次, 1980, 「性差別と性役割」, 『人文研究』32-1, 5-24.
- 金井淑子編, 1988, 『シリーズワードマップ家族』, 新曜社.

- 神原文子, 1980, 「生活構造からみた主婦役割モデル—都市家族における一つの検証」, 『社会学評論』 31-1, 31-59.
- 神原文子, 1981a, 「主婦の自己実現に関する社会学的一考察」, 『ソシオロジ』 26-1, 1-21.
- 神原文子, 1981b, 「主婦の自己実現に関する要因分析」, 『家族研究年報』 7, 64-79.
- 神原文子, 1981c, 「夫の家族役割遂行モデル」, 『現代社会学』 16, 講談社, 126-153.
- 神田道子, 1975, 「家族制度と婦人労働」, 『看護』 2-7, 11-17.
- 神田道子, 1985, 「性役割と子ども」, 清水義弘監修『子どもはどう育つか』, 有信堂, 111-131.
- 神田道子他, 1990, 「性役割の変動過程を説明する〈折り合い行動〉概念」, 『女性学研究』 1, 22-41.
- 春日キスヨ, 1980, 「現代既婚婦人をめぐる社会的緊張とその社会的基盤」, 『岩国短期大学紀要』 17, 37-50.
- 春日キスヨ, 1986a, 「男性における相補的両性関係の矛盾—父子家庭男性の『閉塞』と『解放』」, 『女性学年報』 7, 21-32.
- 春日キスヨ, 1986b, 「男性における相補的両性関係の矛盾—父子家庭男性の『孤立』と『孤独』」, 『岩国短期大学紀要』 14, 41-61.
- 春日キスヨ, 1989, 『父子家庭を生きる—男と親の間』, 勁草書房.
- 片瀬一男, 1991, 「社会化価値とジェンダー—家族における社会化価値の性差・階層差」, 『東北学院大学論集 人間・言語・情報100』, 61-84.
- 川口桐子・本村汎, 1996, 「青年後期における子どもの Androgyny と自我同一性に関する親子の関係要因をめぐる一研究」, 『家族関係学』 15, .
- 賀谷恵美子, 1981, 「性役割の社会化」, 女性社会学研究会編『女性社会学をめざして』, 垣内出版, 180-206.
- 木戸功, 1996, 「それは家族であるのか、家族ではないのか、ではどうすれば家族であるのか—『家族』とその状況規定」, 『家族研究年報』 21, 2-13.
- 金恩美・本村汎, 1992, 「韓国における『女性の就労活動』に対する既婚男女の態度研究—属性要因および『家族志向性』との関連で」, 『家族研究年報』 17, 27-40.
- 金恩美・本村汎, 1993, 「夫婦間の家事分担と意志決定の認知差に関する日韓比較研究」, 『大阪市立大学生活科学部紀要』 40, 229-237.
- 金恩美・本村汎, 1995, 「妻の就労が夫婦の家事分担度と意志決定度を介して日本人・韓国人夫婦の結婚満足度に与える影響」, 『家族関係学』 14, 53-62.
- 木本喜美子, 1986, 「主婦の賃労働者化と地域社会」, 『地域問題研究』 29, 3-9.
- 木本喜美子, 1990, 「家事と女と男と『愛』」, 木本喜美子編『女と男の第2楽章』, 連合出版, 109-142.
- 木本喜美子, 1991, 「都市と女性—都市生活のなかの家事と主婦」, 木本喜美子他著『シティライフの社会学』, 時潮社, 47-70.
- 木本喜美子, 1992a, 「現代家族とジェンダー問題」, 西村豁通・木村正身編『社会政策学と生活の論理』啓文社, 173-195.

- 木本喜美子, 1992b, 「新しい家族社会学への誘い」, 『一橋論叢』107-4, 99-113.
- 木本喜美子, 1994a, 「家族と企業社会」, 中内敏夫・加藤哲郎他『企業社会と偏差値』, 藤原書店, 59-71.
- 木本喜美子, 1994b, 「大企業労働者の〈家族と企業社会〉」, 職業・生活研究会編『企業社会と人間』法律文化社, 351-384.
- 木本喜美子, 1994c, 「家族の現在、そして未来」, 女性労働問題研究会編『女性労働問題研究』25, 4-9.
- 木本喜美子, 1995a, 『家族・ジェンダー・企業社会』, ミネルヴァ書房.
- 木本喜美子, 1995b, 「日本型企业社会と家族の現在」, 基礎経済研究所編『日本型企业社会と家族』, 青木書店, 71-99.
- 木本喜美子, 1995c, 「ジェンダーと家族」, 『昭和女子大学女性文化研究所紀要』16, 3-16.
- 喜多川豊字, 1990, 「家族機能の外部化と情報化社会—ネットワークとフェミニズム」『東洋大学社会学研究所年報』22, 207-218.
- 菰淵緑, 1992, 「『夫婦の勢力構造』再考—測定・分析に向けて」, 『社会問題研究』42-1, 19-36.
- 熊谷文枝, 1979a, 「夫婦の葛藤解決表出過程—日・印・米の比較調査」, 『社会学評論』117, 36-50.
- 熊谷文枝, 1979b, 「夫婦の権力構造と暴力—日・印・米の比較調査」, 『家族研究年報』5, 22-34.
- 熊谷苑子, 1979, 「現代社会における主婦労働の位置づけ」, 『清泉女子大学紀要』27, 35-42.
- 熊原理恵, 1990, 「現代家族論の視角をめぐる—考察—女性解放論と家族社会学の接点をめぐる」, 『立命館産業社会論集』65, 137-169.
- 国弘陽子, 1993, 「都市の生活世界と女性の主婦意識」, 矢澤澄子編『都市と女性の社会学—性役割の揺らぎを超えて』, サイエンス社, 69-106.
- 黒田浩一郎, 1986, 「主婦の「身体化」と「母原化」—長岡京市調査報告」, 『ソシオロジ』31-1, 21-46.
- 草柳千早, 1994, 「夫婦別姓が提起する問題」, 『女子教育もんだい』58, 16-22.
- 桑畑勇吉, 1971, 「父親の役割と子どもの社会化」, 『社会福祉論集』15-16, 99-116.
- 牧野カツコ, 1980, 「母親としての発達と『甘え』の問題」, 『家庭教育研究所紀要』1, 32-37.
- 牧野カツコ, 1981, 「育児における不安について」, 『家庭教育研究所紀要』2, 41-51.
- 牧野カツコ, 1983a, 「働く母親と育児不安」, 『家庭教育研究所紀要』4, 67-76.
- 牧野カツコ, 1983b, 「共働きと子どもの問題」, 小平記念会編『父親はいま、子どもに何を教えるか』, あすなろ書房, 135-154.
- 牧野カツコ・中西雪夫, 1985, 「乳幼児をもつ母親の育児不安—父親の生活および意識との関連」, 『家庭教育研究所紀要』6, 11-24.
- 牧野カツコ, 1987a, 「働く父親の家庭生活と意識—仕事の忙しさとの関連」, 『家庭教育研究所紀要』8, 42-51.
- 牧野カツコ, 1987b, 「乳幼児をもつ母親の学習活動への参加と育児不安」, 『家庭教育研究所紀要』9, 42-51.

- 牧野カツコ・稲村博, 1987, 「親の不安と子供の悩み、問題行動」, 原ひろ子編『母親の就業と家庭生活の変動』, 弘文堂, 75-107.
- 牧野暢男, 1993, 「父親にとっての子育て体験の意味」, 『発達』56, 28-34.
- 松村真木子, 1993, 「イギリスにおける既婚就労女性の増加—ロンドン中産階級女性の意識と行動」, 『家族関係学』12, 37-47.
- 松村尚子, 1985, 「構造的育児不能社会の中で」, 脇田晴子編『母性を問う—歴史的変遷(下)』, 人文書院, 250-280.
- 松村幸彦, 1982, 「家族集団における新しい父親の役割—家族統合指標としての父親の役割について」, 『人間科学』20, 197-210.
- 松信ひろみ, 1993, 「デュアル・キャリア・カップルにおける夫婦関係について—妻のキャリアが役割関係に与える影響」, 『上智大学社会学論集』18, 73-89.
- 松信ひろみ, 1995, 「二人キャリア夫婦における役割関係—平等主義的家族への可能性」, 『家族社会学研究』7, 47-56.
- 松浦勲, 1990, 「母親の就労と近隣・地域活動」, 『高知大学教育学部研究報告第1部』42, 147-167.
- 目黒依子, 1980a, 『女役割—性支配の分析』, 垣内出版社.
- 目黒依子, 1980b, 『主婦ブルース—女役割とは何か』, 筑摩書房.
- 目黒依子, 1980c, 「女性と家族」, 青井和夫・庄司興吉編『家族と地域の社会学』, 東大出版会, 77-98.
- 目黒依子, 1982, 「家族と性役割の研究動向—アメリカ」, 湯沢雅彦・阪井敏郎編『現代の性差と性役割—性別と家族の社会学』, 培風館, 126-137.
- 目黒依子, 1985, 「中年女性のライフコース—事例研究をもとに」, 家族問題研究会報告書『「現代家族の諸問題」のための基礎研究』, 生命保険文化センター, 109-130.
- 目黒依子, 1987a, 『個人化する家族』, 勁草書房.
- 目黒依子, 1987b, 「女性の地位・役割とその変化」, 竹中和郎他編『改訂新版現代社会論』, 日本評論社, 212-228.
- 目黒依子, 1988, 「家族理論におけるジェンダーとパワー」, 『社会学評論』39, 238-249.
- 目黒依子, 1989a, 「現代主婦の地位と労働」, 石川・峰岸・三木編『家と女性』, 三省堂, 112-125.
- 目黒依子, 1989b, 「就労女性のヒューマン・ネットワーク」, 東京都生活文化局『女性の就労パターンに関する時系列的研究報告』, 101-120.
- 目黒依子, 1991, 「家族の個人化—家族変動のパラダイム探求」, 『家族社会学研究』3, 8-15.
- 目黒依子, 1993, 「ジェンダーと家族変動」, 石原邦雄・佐竹洋人・堤マサエ・望月嵩共編『家族社会学の展開』, 培風館, 211-221.
- 目黒依子編著, 1994, 『ジェンダーの社会学』, 放送大学教育振興会.
- 光吉利之, 1976, 「家事分担」, 上子武次・増田光吉編『三世代家族』, 垣内出版, 138-158.
- 宮坂靖子, 1985, 「Ariès Ph. の近代家族論の再検討」『家族研究年報』11, 67-82.
- 三善勝代, 1991, 「コンピューター・マリッジの実態—首都圏における50組の夫婦への面接を基礎にして」

- 『家族関係学』10, 68-81.
- 三善勝代, 1993, 「コンピューター・マリッジ」, 袖井孝子他編『共働き家族』, 家政教育社.
- 水田珠枝, 1986, 「家族の過去・現在・未来—家庭の崩壊を中心に」『講座・現代 女の一生』4, 岩波書店.
- 本村汎, 1974, 「共働き家族の家事分担、和合、しつけ、政治意識および子供の学業成績—主婦専業家族の場合との比較において」, 『大阪市立大学家政学部紀要』21, 163-175.
- 本村汎・金恩美, 1991, 「韓国における『既婚女性の家庭役割規範』と家族主義に対する既婚男女の態度」, 『大阪市立大学生生活学部紀要』38, 393-407.
- 本村汎・要田洋江, 1981, 「妻の家庭外就労が夫婦間の和合構造に及ぼす影響」, 『大阪市立大学生生活学部紀要』28, 309-324.
- 村井研次, 1971, 「ソ連における女性の地位」, 『ソシオロジ』54. 55, 48-67.
- 牟田和恵, 1991, 「家族の社会史から家族社会学へ」, 『家族社会学研究』4, 67-77.
- 牟田和恵, 1993, 「愛・性・結婚—男と女をめぐる文化」, 井上俊編『現代文化を学ぶ人のために』, 世界思想社, 302-318.
- 牟田和恵, 1996, 『戦略としての家族—近代日本の国民国家形成と女性』, 新曜社.
- 永井暁子, 1992, 「共働き夫婦の家事遂行」, 『家族社会学研究』4, 67-77.
- 長津美代子, 1982, 「共働きは性役割にどう影響するか—日本の場合」, 湯沢雍彦・阪井敏郎編『現代の性差と性役割—性別と家族の社会学』, 培風館, 63-80.
- 長津美代子, 1987, 「社会参加と女性の地位—社会参加は地位を向上させるか」, 袖井孝子・矢野真知編『現代女性の地位』, 勁草書房, 155-184.
- 長津美代子・牧野カツコ, 1990, 「共働きに関する文献研究」, 『母親の就労を中心とした社会参加と親役割に関する調査報告書』, 東京都生活文化局, 161-175.
- 長津美代子, 1991a, 「大学生の性役割意識—男女間のギャップを中心に」, 『日本家政学会誌』42-11, 23-33.
- 長津美代子, 1991b, 「共働き夫婦における第一子出生にともなう対処—常雇と自営の場合」, 『日本家政学会誌』42-2, 25-37.
- 長山晃子・石原邦雄, 1991, 「家族員として意識する範囲—居住形態との関係から」, 『家族研究年報』16, 65-76.
- 直井道子, 1979a, 「女性の自立・女性の老後」, 『月刊国民生活』9-9, 14-20.
- 直井道子, 1979b, 「人間の一生と役割変化—中高年の位置づけ」, 袖井孝子編『収穫の時代』, 垣内出版, 65-93.
- 直井道子編, 1989, 『家事の社会学』, サイエンス社.
- 西村洋子・大橋薫, 1974, 「八王子市における家族調査—主婦労働を中心として」, 『明治学院論叢』219, 15-57.
- 西村洋子, 1975, 「婦人における家庭と職業—主婦労働にみる問題点」, 『創価大学文学部論集』4-2, 65-81.

- 西岡八郎・才津芳昭, 1996, 「家族とは何か—有配偶女子からみた家族認識の範囲」, 『家族研究年報』21, 28-42.
- 野尻(目黒)依子, 1975, 「分析概念としての家族」, 『家族研究年報』1, 1-11.
- 荻野美穂・田邊玲子・姫岡とし子・千本暁子・長谷川博子・落合恵美子, 1990, 『制度としての〈女〉』平凡社.
- 老川寛, 1971, 「主婦の就業に関する覚え書」, 『仏教大学研究紀要』55, 233-277.
- 老川寛, 1982, 「家族と性役割の研究動向—ヨーロッパ」, 湯沢雍彦・坂井敏郎編『現代の性差と性役割—性別と家族の社会学』, 培風館, 138-176.
- 岡村清子, 1989a, 「女性の就労と家族機能の変化」, 『労働調査』250, 25-35.
- 岡村清子, 1989b, 「家事の性格と家事意識」, 直井道子編『家事の社会学』, サイエンス社, 81-112.
- 岡村清子, 1989c, 「有職主婦の家事と無職主婦の家事」, 直井道子編『家事の社会学』, サイエンス社, 137-162.
- 岡村清子, 1990, 「主婦の就労と性別役割分業—女性の職場進出は、家族の役割構造を変えるか」, 『家族社会学研究』2, 24-35.
- 岡村清子, 1993, 「共働きと家事労働の変化」, 袖井孝子・岡村清子・長津美代子・三善勝代『共働き家族』, 家政教育社, 47-86.
- 岡村清子, 1996, 「主婦の就労と性別役割分業」, 野々山久也・袖井孝子・篠崎正美編著『いま家族に何が起きているのか』, ミネルヴァ書房.
- 岡野静二, 1991, 「主婦の社会的自立について」, 東京都立短期大学協会編『社会学』, 酒井書店・育英堂, 67-99.
- 表真美, 1990, 「共働き家庭の食生活と家族関係」, 『家族関係学』10, 82-91.
- 斧出節子, 1993, 「男性にとっての子育ての意味—子どもを持つ男性を対象とする調査より」, 『家族関係学』12, 1-12.
- 斧出節子, 1995, 「バンコクにおける共働き家族と家事労働—社会経済階層別の分析を通して」, 『家族研究』2, 101-116.
- 大出春江, 1983, 「子育て期専業主婦の不安」, 『家族研究年報』9, 52-64.
- 大橋薫・波田あい子, 1976, 「夫婦の『親密性』についての試論」, 『明治学院論叢』249, 1-24.
- 大山治彦, 1995, 「身体の男らしさ・女らしさと自尊感情の関連について」, 『家族社会学研究』7, 69-76.
- 「夫(恋人)からの暴力」調査研究会, 1994, 「夫から妻への暴力—婚姻関係の内外で」, 『女性学研究』3, 122-139.
- 落合恵美子, 1984, 「フェミニズム理論における『家内性』と『近代』—マルクス主義フェミニズム・オートナー派女性人類学・女性の社会史」, 『女性学年報』5, 1-11.
- 落合恵美子, 1985, 「〈近代家族〉の誕生と終焉—歴史社会学の眼」, 『現代思想』13-6, 70-83.
- 落合恵美子, 1987, 『核家族の育児援助に関する調査研究報告書』, 兵庫県家庭問題研究所.
- 落合恵美子, 1989a, 「育児援助と育児ネットワーク」, 『家族研究』1, 109-133.

- 落合恵美子, 1989b, 「家族の集団論的パラダイムを超えて」, 『家族関係学』8, 51-57.
- 落合恵美子, 1989c, 『近代家族とフェミニズム』, 勁草書房.
- 落合恵美子, 1993, 「家族の社会的ネットワークと人口学的世代—60年代と80年代の比較から」, 蓮見音彦・奥田道大編『21世紀日本のネオ・コミュニティ』, 東京大学出版会, 101-130.
- 落合恵美子, 1994a, 「近世末における間引きと出産」, 脇田晴子・S. B. ハンレー編『ジェンダーの日本史(上)』, 東京大学出版会, 425-459.
- 落合恵美子, 1994b, 「『個人を単位とする社会』と『親子関係の双系化』—家族社会学の視点から」, 『ジュリスト』1059, 37-44.
- 落合恵美子, 1994c, 『21世紀家族—家族の戦後体制の見かた・超えかた』, 有斐閣.
- 落合恵美子, 1995, 「近代家族論の曲がり角(1)」, 『日本研究』12, 89-100.
- 小澤千穂子, 1986, 「共働き夫婦における結婚満足度」, 『家族関係学』6, 1-6.
- 阪井敏郎, 1982, 「存在論の系譜からみた性役割—中国と日本の比較を通して」, 湯沢雅彦・阪井敏郎編『現代の性差と性役割—性別と家族の社会学』, 培風館, 97-123.
- 斉藤正二, 1978, 「社会構造と婦人の地位」, 『研究紀要』20, 10-20.
- 笹森英雄, 1992, 「日本における共働き家族—特に看護婦の生活とその家族を中心に」, 日本大学総合科学研究所, 『現代日本文化と家族』, 203-213.
- 関井友子, 1989, 「『男性性』に関する実証的研究—性別役割分業観と自己評価意識において」, 『家族研究年報』15, 65-83.
- 関井友子・本村汎, 1989, 「男性の性別役割分業観と自己実現をめぐる研究—両性性との関連において」, 『家族関係学』8, 1-13.
- 関井友子・斧出節子・松田智子・山根真理, 1991, 「働く母親の性別役割分業観と育児援助ネットワーク」, 『家族社会学研究』3, 72-84.
- 瀬地山角, 1990a, 「家父長制をめぐる」, 江原由美子『フェミニズム論争』, 勁草書房, 47-85.
- 瀬地山角, 1990b, 「韓国・台湾の主婦と女子労働—女性の社会進出の行方を占う」, 『アジア経済』31-12, 22-40.
- 瀬地山角, 1990c, 「主婦の誕生と変遷」, 『相関社会科学』1, 21-34.
- 瀬地山角, 1993, 「東アジアにおける女性の『社会進出』の比較」, 『家族社会学研究』5, 31-36.
- 瀬地山角, 1994, 「家父長制の比較社会学—東アジアの女性の就労パターンの比較」, 原ひろ子・大沢真理・丸山真人・山本泰編『ジェンダー』, 新世社, 298-318.
- 瀬地山角, 1996, 『東アジアの家父長制—ジェンダーの比較社会学』, 勁草書房.
- 渋谷敦司, 1984a, 「現代アメリカにおける『女性役割』の変化と『家族問題』」, 『立命館産業社会論集』38, 87-128.
- 渋谷敦司, 1984b, 「現代社会における女性の位置—『階級・階層』論における女性の位置づけと関連して」, 『立命館産業社会論集』47, 27-62.
- 渋谷敦司, 1994, 「国際的な家族政策の形成過程とジェンダーの問題」, 『家族研究年報』19, 42-57.
- 品田知美, 1996, 「既婚女性の家事時間配分とライフスタイル」, 『家族社会学研究』8, 163-173.

- 篠崎正美, 1982, 「共働きは性役割にどう影響するか—欧米の場合」, 湯沢雍彦・阪井敏郎編『現代の性差と性役割—性別と家族の社会学』, 培風館, 40—62.
- 庄司洋子, 1986, 「性別分業論の検討」, 布施晶子・清水民子・橋本宏子編『現代家族の危機と再生 1. 現代の夫婦』, 青木書店, 182—212.
- Stacey, J., 1986, “Are Feminists Afraid to Leave Home?”, Mitchell, J. & Oakley, A., *What is Feminism?*, Blackwell, 219—248.
- Stacey, J., 1993, “Good Riddance to “The Family”: A Response to David Popenoe”, *Journal of Marriage and the Family*, 55—3, 545—547.
- 副田あけみ, 1984, 「女子青年における性役割の社会化」, 『東京女子大学付属比較文化研究所紀要』45, 50—70.
- 副田義也, 1986, 「男性の性的社会化」, 『東京女子大学付属比較文化研究所紀要』47, 75—93.
- 袖井孝子他編, 1987, 『現代女性の地位』, 勁草書房.
- 袖井孝子・岡村清子・長津美代子・三善勝代, 1993, 『共働き家族』, 家政教育社.
- 袖井孝子, 1984, 「家族の変化と女性の役割」, 女性学研究会編『講座女性学2』, 勁草書房, 45—67.
- 末広和子, 1974, 「現代家族の婦人問題」, 家族問題研究会『現代日本の家族—動態・問題・調整』, 培風館, 139—156.
- 菅谷よし子, 1985, 「農村婦人の就労における世代的変化」, 『老年社会科学』7, 81—96.
- 菅谷よし子, 1986, 「農村婦人のライフコース順調度—幸福曲線の世代比較」, 『宮城学院女子大学研究論文集』64, 55—86.
- 杉岡直人, 1984, 「父子関係と子供の社会化」, 『北星論集』21, 109—138.
- 高橋博子, 1995, 「育児をめぐる世代間交流」, 青井和夫編『高齢社会の世代間交流』, 長寿社会開発センター, 83—115.
- 高島昌二, 1976, 「村落社会の変動と共働き家族」, 土井康生編『農業理論と村落社会』, 有信堂, 245—281.
- 高島真澄・吉田昭久・小熊均・吉田紘子, 1984, 「『現代家族』の批判的検討(3)—女子大生の性差別意識形成に及ぼす社会的要因の検討をとおして」, 『茨城大学教育学部紀要人文・社会科学・芸術』33, 49—67.
- 高島真澄・吉田昭久・吉田紘子, 1985, 「『現代家族』の批判的検討—女子大学生の性差別意識形成に及ぼす社会的要因に関する現象学的分析」, 『茨城大学教育学部人文・社会科学・芸術』34, 147—169.
- 高村寿子・小林ゆう子・佐久間淳・村上ひさ子・藤森由美子, 1987, 「大学生における性役割の意識調査—性役割意識の形成と Sexual Identity」, 『思春期学』5—4, 542—549.
- 田間泰子, 1985, 「つくられた母性愛神話—近代西洋医学と精神分析」, 『女性学年報』6, 16—25.
- 田間泰子, 1991, 「中絶の戦後史」, 上野千鶴子他編『シリーズ変貌する家族 1 家族の社会史』, 岩波書店, 199—228.
- 田村健二, 1982, 「共働き家庭の育児の実態」, 稲村博・小川捷之編『共働き—シリーズ現代の子ども

- を考える・14』， 共立出版， 24-47.
- 田村喜代， 1983， 「家庭教育と父親—その性役割を追って」， 『家政学雑誌』 34-7， 49-53.
- 田中和子， 1979， 「中・高年主婦の生活と意識」， 袖井孝子・直井道子編『中・高年女性学』， 垣内出版， 16-59.
- 立岩真也， 1991， 「愛について—近代家族論・1」， 『ソシオロギス』 15， 35-52.
- 立岩真也， 1992， 「近代家族の境界—合意は私達の知っている家族を導かない」， 『社会学評論』 42-2， 30-44.
- 立岩真也， 1994， 「夫は妻の家事労働にいくら払うか—家族／市場／国家の境界を考察するための準備」， 『人文研究』 23， 63-121.
- 寺田篤弘， 1981， 「疎外論からみた家事労働について」， 『日本大学文学部研究年報』 29， 201-211.
- Thompson, C. & Walker, A.J., 1995, The Place of Feminism in Family Studies, Journal of Marriage and the Family, 57, 847-865.
- 千葉モト子， 1982， 「性役割の社会学について」， 『四天王寺国際仏教大学短期大学部紀要』 23， 27-37.
- 苦米地伸， 1996， 「『結婚』と『愛情』、どちらが先か？—『夫婦別姓』問題のレトリックから」， 『家族研究年報』 21， 62-73.
- 上野千鶴子， 1980， 「主婦論争を解説する」， 『女性学年報』 1， 39-50.
- 上野千鶴子， 1981， 「『選択の自由』再論」， 『女性学年報』 2， 43-51.
- 上野千鶴子， 1985a， 「家族の前近代、近代、脱近代」， 『世界』 8， 125-135.
- 上野千鶴子， 1985b， 『資本制と家事労働—マルクス主義フェミニズムの問題構制』， 海鳴社.
- 上野千鶴子， 1990a， 「女性の変貌と家族」， 遠藤惣一他編『現代日本の構造変動—1970年以降』， 世界思想社， 143-165.
- 上野千鶴子， 1990b， 『家父長制と資本制』， 岩波書店.
- 上野千鶴子， 1991， 「ファミリー・アイデンティティのゆくえ—新しい家族幻想」 『シリーズ変貌する家族1 家族の社会史』， 岩波書店， 1-38.
- 上野千鶴子， 1994， 『近代家族の成立と終焉』， 岩波書店.
- 上野千鶴子他編， 1991-92， 『シリーズ変貌する家族』， 岩波書店.
- 上杉孝， 1987， 「父親も子育てに参加してみれば—共同の子育ての探求」， 富士谷あつ子編著『暮らしのなかの女性学』， ミネルヴァ書房， 186-203.
- 内田哲朗， 1994， 「家事を分担する男たち—家事及び性役割に対する意識」， 『家族研究年報』 19， 58-69.
- 渡辺深， 1980， 「夫婦間の勢力関係についての試論—勢力—依存理論とネットワーク分析の適用」， 『家族研究年報』 6， 29-41.
- 渡辺深， 1989， 「夫婦間の勢力と安定性—妻の就業の影響」， 『家族研究年報』 14， 31-43.
- 渡辺良智， 1973， 「ソヴィエトの婦人労働」， 『日本労働協会雑誌』 172， 33-45.
- 山田昌弘， 1983， 「近代家族の危機的傾向—家族役割と家族情緒の乖離」， 『ソシオロギス』 7， 48-56.
- 山田昌弘， 1984， 「家族定義論の検討」， 『ソシオロギス』 10， 52-63.

- 山田昌弘, 1987a, 「避妊と中絶—その論理と感情」, 『東京学芸大学紀要第3部門』39, 61-76.
- 山田昌弘, 1987b, 「近代家族形成における『情緒』の二つの意味」, 『現代社会学』13-2, 110-132.
- 山田昌弘, 1989a, 「『恋愛』社会学序説—恋愛の社会学的分析の可能性」, 『年報社会学論集』2, 95-106.
- 山田昌弘, 1989b, 「家事労働の行方—『義務』と『自発性』の間」, 『社会保障研究』25-2, 145-155.
- 山田昌弘・天木志保美, 1989, 「家族とジェンダー」, 江原由美子・長谷川公一・山田昌弘・天木志保美・安川一・伊藤るり『ジェンダーの社会学—女たち/男たちの世界』, 新曜社, 95-138.
- 山田昌弘・瀬地山角, 1989, 「性別役割分業隠蔽のメカニズム」, 『家族研究年報』14, 59-72.
- 山田昌弘, 1992a, 「福祉とジェンダー—その構造と意味」, 『家族研究年報』17, 2-14.
- 山田昌弘, 1992b, 「『家族であること』のリアリティ」, 好井裕明『エスノメソドロロジーの現実—せめぎ合う〈生〉と〈常〉』, 世界思想社, 151-166.
- 山田昌弘, 1994a, 「家族の多様化の中の男性」, 『都市問題』85-8, 51-60.
- 山田昌弘, 1994b, 『近代家族のゆくえ—家族と愛情のパラドックス』, 新曜社.
- 山本祥子・本村汎, 1986, 「高学歴女性の性役割規範に対する態度—中年期のアイデンティティ形成に向けて」, 『大阪市立大学生生活科学部紀要』34, 419-434.
- 山村賢明, 1971, 「日本の母子関係」, 『家庭科教育』45-12, 8-38.
- 山根真理, 1990, 「『近代的母親規範』に関する考察」, 『家族関係学』9, 21-32.
- 山根真理・松田智子・斧出節子・関井友子, 1990, 「保育園児をもつ母親の育児問題—育児不安を中心に」, 『総合社会福祉研究』2, 110-121.
- 山根真理, 1995, 「情報装置と家族ライフスタイルのゆくえ—家族ライフスタイルのジェンダー間差異を中心に」, 『家族研究』2, 117-130.
- 大和礼子, 1990, 「『選べる』関係と『選べない』関係—夫婦関係の二側面」, 『家族研究年報』16, 38-50.
- 大和礼子, 1995, 「性別役割分業意識の二つの次元—『性による役割振り分け』と『愛による再生産役割』」, 『ソシオロジ』40-1, 109-126.
- 柳原佳子, 1995, 「ジェンダーと権力構造」, 『家族社会学研究』7, 23-32.
- 矢野真和, 1987, 「女性の地位は何によって決まるか」, 袖井孝子他編『現代女性の地位』, 勁草書房, 61-87.
- 矢野裕子, 1996, 「人工妊娠中絶に対する男性教師の意識」, 『家族関係学』15, 1-10.
- 吉田あけみ, 1992, 「大学生の性別意識—愛知県内大学生への性別意識調査より」, 『名古屋短期大学研究紀要』30, 267-289.
- 吉田昭久・小貫祐子・小熊均, 1982, 「『現代家族』の批判的検討—『女性』性形成過程に影響を及ぼす社会的要因の検討を通して」, 『茨城大学教育学部紀要人文・社会科学』31, 93-116.
- 吉田夫美子, 1977, 「老人夫婦世帯における家事労働の研究」, 『社会老年学』7, 24-32.
- 吉田啓子, 1972, 「現代家族社会学批判」, 『名城商学』21 (別冊), 37-54.

- 善積京子, 1977, 「日本における非嫡出子—歴史的推移とその社会的要因」, 『大手前女子短期大学研究集録』2, 27-44.
- 善積京子, 1978, 「非嫡出子の発生に関する通文化的研究」, 『研究報告集』15, 89-94.
- 善積京子, 1983, 「日本における非嫡出子の出生・養育過程の考察—児童相談所里親委託事例を通して」『ソシオロジ』27-3, 45-73.
- 善積京子, 1984, 「非婚の母の最近の動向」, 『家族関係学』3, 27-34.
- 善積京子, 1985, 『脱・結婚』, 世界思想社.
- 善積京子, 1986, 「日本の非婚の母のおかれている状況—児童相談所里親委託事例を通して」, 『新しい家族』9, 2-16.
- 善積京子, 1987, 「多様化する家族」, 『新しい家庭科WE』6-11, 36-40.
- 善積京子, 1990, 「スウェーデンの結婚・家庭 変わる夫婦の絆」, 『追手門学院大学文学部紀要』24, 111-132.
- 善積京子, 1991a, 「スウェーデンの性教育と結婚」, 『家族関係学』10, 139-150.
- 善積京子, 1991b, 『非婚を生きたい—婚外子の差別を問う』, 青木書店.
- 善積京子, 1992a, 「スウェーデンの家族はどこに行く」, 布施晶子・玉水俊哲・庄司洋子編『現代家族のルネサンス』, 青木書店, 56-74.
- 善積京子, 1992b, 「婚外子の差別と女性の自立」, 『女子教育もんだい』53, 12-17.
- 善積京子, 1993a, 『婚外子の社会学』, 世界思想社.
- 善積京子, 1993b, 「非婚同棲カップルのライフスタイル」, 『家族社会学研究』5, 67-74.
- 善積京子, 1994a, 「選択動機から見た日本の非法律婚カップル」, 『追手門学院大学文学部紀要』29, 95-114.
- 善積京子, 1994b, 「非法律婚カップルの現在」, 『都市問題』85-8, 23-37.
- 善積京子, 1995a, 「非法律婚カップルと婚外子」, 袖井孝子・鹿島敬編『明日の家族』, 中央法規出版, 195-218.
- 善積京子, 1995b, 「スウェーデンのカップル形成の三形態」, 『追手門学院大学人間学部紀要』1, 159-178.
- 善積京子, 1995c, 「非法律婚カップルの選択動機と差別の実態」, 『女性学』3, 31-46.
- 善積京子, 1995d, 「近代家族の変容と家族のレギュレーション」, 『神奈川大学評論』22, 107-116.
- 善積京子, 1997, 『〈近代家族〉を超える』, 青木書店.
- 要田洋江, 1982, 「共働き家族」, 大橋薫編著『地方中核都市の社会病理』, 川島書店, 176-191.
- 湯沢雍彦, 1972, 「ソビエトの結婚と共働き」, 『家庭科教育』11, 76-79.
- 湯沢雍彦・相馬多希子, 1978, 「老親扶養と夫婦就労との関連性」, 『社会老年学』9, 81-86.
- 湯沢雍彦・坂井敏郎編, 1982, 『現代の性差と性役割—性別と家族の社会学』, 培風館.